

【神奈川銀杏会ニュース】 第49号

平成29年7月発行

東京大学同窓会連合会20周年記念表彰

4月22日(土)、本郷キャンパス山上会館にて東京大学同窓会連合会20周年式典が開催され、席上、永年同窓会活動に貢献のあった団体・会員の表彰が行われました。神奈川銀杏会関係では銀杏会本体を含めて1団体・9名が表彰されました。受賞団体・受賞者と表彰理由は次のとおりです。

1. 神奈川銀杏会 表彰理由 平成23年から5年間、神奈川県が推進している「森林再生パートナー制度」に他の団体(一般社団法人神奈川経済同友会、NGO オイスカ神奈川推進協議会)と協働して取り組んだ。(社会貢献活動)
2. 土井 修 表彰理由 永年にわたり昼食会「三土会」の幹事を務め、平成19年からは神奈川銀杏会会長を4期8年の長きにわたり務め、神奈川銀杏会をリードした。
3. 中島 敏 表彰理由 神奈川銀杏会創設メンバーで、朝食会「三火会」立上げ時から幹事として永年にわたり会をリードしてきた。近年は副会長として神奈川銀杏会の活動をリードしてきた。
4. 宇田川 潔 表彰理由 神奈川銀杏会創立以来のメンバーで、永年にわたり「ゴルフ会」幹事として、近年は副会長として、神奈川銀杏会の活動をリードしてきた。
5. 石原 寛 表彰理由 神奈川銀杏会創設メンバーで、副代表幹事、代表幹事として永年にわたり神奈川銀杏会の運営をリードしてきた。
6. 羽田 壽夫 表彰理由 神奈川銀杏会創設メンバーで、永年にわたり昼食会「三土会」幹事として活躍し、現在は代表幹事を務めている。
7. 鈴木 庸夫 表彰理由 神奈川銀杏会創設メンバーで、永年にわたり「囲碁の会」幹事として神奈川銀杏会の活動をリードしてきた。
8. 生駒 純一 表彰理由 10年以上にわたり広報誌「神奈川銀杏会ニュース」の広報幹事を務めてきた。
9. 濃沼 健夫 表彰理由 10年以上にわたり広報誌「神奈川銀杏会ニュース」の広報幹事を務めてきた。
10. 松永 裕 表彰理由 神奈川銀杏会創設メンバーで、事務局機能を担ってきた。

幹事会だより

1 幹事会の開催報告

6月14日(水)、横浜駅西口の会場にて幹事会を開催しました。会長、副会長1名、副代表幹事5名、幹事1名の計8名が出席し、会員拡大方法、第25回定例総会の日程・講演会講師などについて議論しました。

会員拡大方法につきましては、三土会・食楽会のように日程的にも参加しやすい同好会に誘ってみる、若手交流会の参加者の中から幹事になってもらう、といったアイデアが出て、実行に移すことにしました。

第25回定例総会につきましては、次の日程で開催することといたしました。

日 時：平成29年10月1日(日) 午後3時30分～午後7時30分

場 所：ワークピア横浜(横浜市山下町24-1)

総 会 午後3時30分～午後4時 (3階 やまゆり)

講演会等 午後4時～5時30分 (3階 やまゆり)

懇親会 午後5時30分～午後7時30分 (3階 かもめ)

講演会の講師の選定等はこれからですので、会員の皆様におかれましても、総会に合わせて開催する講演会・アトラクション等につきまして、ご意見・アイデア等を次の事務局Eメールアドレスまでお寄せください。

ご連絡先 神奈川銀杏会事務局(連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

会の詳細及びお申し込み方法につきましては、開催1か月前までにお知らせいたします。

2 若手交流会の開催報告

2月4日(土)、クルーズ・クルーズYOKOHAMAにて第3回若手交流会を開催しました。今回の若手からの話題提供は「意外に知られていない知的財産マネジメントの極意」でした。若手12名、会長以下役員4名の計16名が参加し、交流・懇親いたしました。

3 T F Tへの登録・活用の推進

会員の皆様、東京大学が運営するT F T (TODAI for tomorrow: 東京大学オンラインコミュニティー) に登録し、卒業生検索の機能を活用し、つながりのある同窓生に連絡をとり、神奈川銀杏会の同好会に誘ってみましょう。T F Tに登録するには東京大学が開設しているホームページ: 東大アラムナイからアクセスします。

東大アラムナイ/東京大学校友会 (旧名称: 赤門学友会) ホームページ

<http://www.u-tokyo.ac.jp/index/alumni.html>

※「東大アラムナイ」で検索もできます。

同好会活動

(1) 三土会

三土会(昼食会)は、神奈川銀杏会の同好会活動の一環として、会員各位の知識教養を高めるとともに、会員相互の親睦を深める場として開催しております。

多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

[開催日時] : 毎月第三土曜日 11:30~14:00

・昼食をとり、話題提供者のスピーチを聴いた後、意見交換・自由討論をいたします。

・当日の予定 11:30~12:30 昼食及び会員懇談

12:30~13:30 話題提供

13:30~14:00 質疑応答及び意見交換・自由討論

・テーマに依りスケジュールを変更する場合がございます。

[開催場所] : クルーズ・クルーズYOKOHAMA Tel: 045-450-2111

J R横浜駅東口徒歩3分 スカイビル27F

[平成29年の今後の予定] : 話題提供者の敬称略

H29 7月15日 「電池の始まり、現状、そして将来」

佐藤祐一(ゲスト・理化学研究所 元神奈川大学)

H29 9月16日 「ドラム演奏による認知機能改善効果の検証」 宮崎敦子

(ゲスト 医学博士 理化学研究所 イノベーション推進センター 中村特別研究室 特任研究員)

三土会のホームページには、毎回の話題の要約が掲載されています。

<http://kanagawaichousandoka.in.cocan.jp/index.html>

[参加申込方法] :

参加御希望の方は開催日の1週間前までに幹事宛てに申し込んでください。

[会費] : 3,000円-3900円/人程度(実費)。話題提供者は無料

[幹事連絡先] :

・羽田壽夫 (連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

・奥出信一郎 (連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

(2) 三火会

三火会開催案内(毎月第三火曜日07:00~09:00)

三火会では毎回会員や卒業生の中からお一人に話題のご提供をお願いして、仕事上の経験や研究成果、趣味をはじめ、海外情勢、産業や技術の動向、エネルギー、情報化、高齢社会、子ども、教育、福祉、文化等の幅広い分野の最新動向をもとに、食と学びを楽しみつつ会員相互の親睦を深めています。

なお、7月から会場が下記に変わりますのでご案内します。

[会場] ホテル横浜キャメロット・ジャパン2階=レストラン『スタビアーナ』

横浜駅西口地下街12番出口(商工中金ビルの隣)

電話:045-312-2111

[時間] 7:00~9:00頃まで

【会費】1620円(朝食代)

【当面の予定】

7月18日(火) 話題提供: 門井龍太郎氏(S40工)「データ駆動型社会(その2)」

8月15日(火) 話題提供: 赤石慎一氏(S34法)「不都合な現実(その2)」

9月19日(火) 話題提供: 松村幸子氏(S33医衛)「(調整中)」

10月17日(火) 話題提供: 天野浩氏(S32工)「我が国の生産性とGDPについて考える(2)」

11月21日(火) 話題提供: 村田禪氏(S35工)「(調整中)」

12月12日(火) 忘年会

1月16日(火) 話題提供: 齋藤毅氏(S37法)「(調整中)」



〈写真:三火会6月例会後の記念撮影〉

【連絡先】 担当幹事(浅沼)まで (連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

(3) ゴルフ会

会費: 年会費無料

会員: 神奈川銀杏会会員およびその配偶者の方 (現在会員登録数 80 名)

(入会申し込み: 氏名、卒業年次・学部、オフィシャル or プライベートハンデキャップ、〒番号、住所、Tel、Fax 番号、Eメールアドレスを幹事まで連絡ください。)

幹事: 宇田川 潔 (連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

(4) 食楽会

梅雨空の続く今日この頃ですが、会員の皆様におかれましてはグルメパワーを発揮され、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さてかねてよりご案内のとおり、今年度より年 4 回から年 6 回に増開催を予定しております食楽会の第 3 回は去る 6/3(土)に、日本料理の巨匠がひっそりと営む平塚の小さな名店「貴柳庵」にて本格的な日本料理を味わう会を開催いたしました。当日は 15 名参加の下、78 歳になるご主人の日本料理に関するご講話を拝聴した後、繊細な和食を美酒とともに堪能いたしました。会食後にはお土産に名物である「都饅頭」をほぼ全員がお買い求めになり、ご家族で楽しまれました。

次回は東京かつ平日開催となりますが、会員様のご推薦により、8/4 (金) 17 時から学士会館ビアホールにて開

催させていただきます。(8/5(土)の開催を企画しておりましたが、土曜日は非営業日のため、変更させていただくことにいたしました。ご容赦ください。)

東京での開催ですので、事務局及び東京銀杏会の会員様もこの機会に懇親を深めるべく、ぜひ積極的にご参加くださるようお願い申し上げます。



これを機会に新規に入会を希望される方は、下記幹事までメールにて「卒業年次・学部・ご住所・電話番号（携帯電話番号とも）」をご記入の上、お申込みをぜひお願いいたします。

- 大久保敏治 (神奈川銀杏会会長) (連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)
- 豊吉 誠治 (連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)
- 福山 隆幸 (連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

(5) 気功の会

気功の会は、神奈川銀杏会の同好会活動の一環として、会員各位の健康を増進するとともに、会員相互の親睦を深める場として開催しております。

多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

[開催日時] : 毎月第一、第三土曜日 9:30~14:00

**[開催場所] : 神奈川区金港町1-11 ナビューレ横浜タワーレジデンスの3階音楽スタジオ
JR横浜駅東口徒歩6分**

[参加申込方法] :

参加御希望の方は開催日なるだけ早く幹事宛てに申し込んでください。

[会費] : 300円/人程度。ただし、初回参加の方にかぎり、2,500円の「自宅練習用のCD」をご購入いただきます。

[幹事連絡先] :

幹事 奥出 信一郎 (連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

副幹事 福山 隆幸

講師 大畑 敏久 日本智能気功学院認定指導員、気功歴20年

*** 科学的宗教論 天国はみんなで作るもの 2017年6月20日
若杉忠男

* 1 西歐文明の行き詰まり

私も83歳になって歩行も困難で耳も遠くなり、周囲からはボケ老人と思われているようだ。やる気も衰えてきて、生きるのも面倒だが死ぬのも怖い。だがせつかく人間として生を受けたのだからがんばろうと思う。

昔から、働かざる者食うべからずという言葉がある。高齢者や障がい者のような役に立たないものは生きる価値がないという考えである。いま、人間の価値を決めているのは、主に西歐の一神教であり、神が人間を作ったと考え、人間は神に選ばれた特別なものだから猿などと違うとした。それが人間の傲慢さのもとになったと思う。しかし死んだら神が“天国”に受け入れてくださると信じられる日本人は少ないだろう。日本の仏教は、この世は“無”だとか“空”だとかいって神の存在に否定的である。西歐文化を受け入れて死刑に反対する人に聞きたい。本当に神などというものを信じられるかと。

この地球は人口が増えすぎて資源の奪い合いなどで戦争が絶えない。今や人間は人間にとって有害な生き物なのである。安楽死とか産児制限なども必要なのではないだろうか。十数人の障がい者が殺害された“やまゆり園”の事件は一狂人の偶発的な事件ではない。人間の価値を人間にとって役に立つかどうかで判断したのである。役に立たないものには貨幣価値がないという考えが資本主義であり、これも西歐で生まれた思想である。西歐の文化は行き詰まっている。控え目についても曲がりかどに来ているといえるだろう。

* 2 宗教と科学の比較

宗教と科学は、地動説や進化論などでしばしば対立し、だいたい科学が勝ってきた。宗教は天国の存在や人間を神が作ったという説を納得できるように説明してはいないし、質問も許さない。たとえば生まれたばかりで罪もないと思われる幼児が、なぜ天災で大人たちと一緒に死ななければならないのかとか、同じ一神教なのに、キリスト教ではミサで葡萄酒を飲むのに、なぜイスラム教では禁酒なのかなどである。

科学の進歩の結果、宗教も科学的な考えを無視できなくなってきた。一般の人が超自然的な奇跡を信じなくなったのだ。科学にも限界があり、人間の寿命を無限に伸ばすことなどできないし、人間の平均寿命はわかっても、自分が何月何日に死ぬかはわからない。わかっても死刑を宣告されたようなもので有難くはない。また東京直下型の地震の起きる確率は今後30年間に70%だと言われているが、対策として建物の耐震補強をする人はいても、地震がおきないようにと神に祈る人はいないだろう。神は科学よりも信頼されていないのである。信じてもらえない神は神とはいえない。神も人間も未来を予測する能力はない。神が人間を作ったのではなく、実際には人間が人間の理想像として神を作ったのだ。

* 3 たからこ（宝子）と神

日本のある地方では、何の役にも立たない障がい者を“たからこ（宝子）”と呼んで優しく接するそうだ。“たからこ”という語を一般の辞書などで検索しても見つからないが、不幸を一身に背負ってくれるから他の者は幸せでいられるという考えであろう。病気で寝込んだときに、「病も神のめぐみです。笑顔ですごしましょう」と言われたことがある。そういう社会にはゆとりが感じられる。

一方、今の世界では各国が軍備拡張の競争をしている。この競争には限界がないから行き着く先は人類の破滅であろう。人間は一回なぐられると、二回なぐり返さないと気が済まず、百万円もうかると二百万円ほしくなるようにできている。そして年をとればだれでも体も不自由になり、他人の助けが必要になる。それが限度を越せば、介護する人や器具や薬の奪い合いになり、軍拡競争と同じようなことになるだろう。人間は神にも悪魔にも容易になるのだ。

一神教では、信仰をもつ者は天国に迎えられ、そこではみんな贅沢ができ、憂いも悩みもないと教えている。しかし贅沢も永遠に続けば飽き、憂いも悩みもなければ退屈で眠くなるだけであろう。天国で暮らすとは、結局安らかに眠ることと同じだと考えると、憂いも悩みも適度ならばよい刺激であり、悩みの多いこの世もそう悪いものではないと思える。羊が増えすぎれば狼が必要のように、悪魔もまた必要なのである。みんなに嫌われるテロリストも人間である。だから神も悪魔も人間の心の中に存在する。やさしい人の心には宝子が住んでいると思う。

* 4 空想から現実へ

神は人間の理想像として人間によって作られたのだと思う。そこにイエスという一人の男が現れた。イエスは当時の人の常識として神の存在を信じていたと思うが、十字架の上で神に助けを求めても神は助けてくれなかった。しかし彼は魅力のある立派な人だったのだろう。死んでからその教えは広まり彼自身が神にされ、キリスト教が生まれた。神は理想で現実のものではないが、イエスは実在の人である。これにより理想の世界から現実の物理的な世界に変わったのであり、それこそが奇跡である。人は神に見放されたとも言えるし神から解放されたともいえる

だろう。死んだら神が天国で迎えてくれるという夢は終わった。

今キリスト教はカソリックやプロテスタントなどの宗派にわかれたり、他の一神教などと争ったりしている。一神教と言ってもイスラム教の神とキリスト教の神は同じではない。だからイスラム教では禁酒を守り、キリスト教ではミサに葡萄酒を使う。神は理想というより空想であるが、人は生まれながらに理想を求める心を持っている。だから人は生きる意味や生き方、その目標を知りたくて、神に祈ると心が安らぐのである。しかしこれらの質問は自分で考えるべきものであろう。自爆テロを実行しようなどと考えている若者に言いたい。「ちょっと待て。天国なんてないかもしれないぞ」と。

人間の歴史を見ると戦争が絶えない。地球という資源に限界があるのに、人口を増やし続けた。味方の数が多いほど、戦争でも、民主主義の多数決制度でも有利である。人の命は神から与えられた尊いものだと考える宗教の教えもそれを支持している。

しかし歴史を見ると、戦争は資源の奪い合いで、貧しい国から起きている。第一次世界大戦はドイツ、第二次世界大戦は日本も入って戦争の火元となった。いまはミサイルを誇示している北朝鮮や自爆テロを生むイスラム国、アメリカでは繁栄から取り残された白人層がトランプ氏を支持していると言われている。そして紛争の口実やテロリストの扇動に、宗教はよく使われている。

日本は一神教の影響はあまり大きくはないが、新聞の投書欄に宗教の戒律の例として「殺すな」「盗むな」「淫行するな」があるのに、教育勅語にはそれらがなくて「君へ忠」があり、日本人の道徳観が世界の常識からみると好戦的だという批判があった。

いまの世界は、経済すなわち損得に大きく動かされており、安倍政権も経済問題をかかげて憲法を改正し、歴史を第二次世界大戦前の状態に戻そうとしているように思える。しかし天皇陛下万歳と叫んで死に、靖国神社に葬られるのを名誉と思う青年はいまの日本には少ないだろう。青年たちも愛国心を持っているが、いろいろな主義主張にさらされ、真面目だからこそ迷いも大きいはずだ。いま銃口を向けている先にいるのはだれか、守っているのは何かを考えたら簡単に引き金を引けないだろう。

今後も、あらたな思想が生まれるだろうが、自然科学では、この宇宙は永遠に膨張しつづけるとされている。人類の繁栄期間などほんの束の間らしい。それが人類にとって平和で楽しいものであってほしい。

* 5 道徳について

神が人間を作ったのではなく人間が自分たちの理想像として神を作ったものだとすると、人生をどう生きるべきかということを示す道徳も神に代わって人間が作らなければならないだろう。実際、裁判員制度の普及などによって、罪と罰の判定は神の手から人間の手にと渡されつつある。そしてキリスト教では愛を道徳の基本だとしているが、それよりもっと広く、人間以外の生物や地球環境への配慮なども含め、“思いやり”が必要だと考える。この世には神だけではなく悪魔もいるとすると、“あきらめ”とか“許し”とか“がまん”なども必要で、仏教の慈悲に近いものになるのではないだろうか。

“善悪は実在するか”（河野哲也著、2007年、講談社）から、西欧の思想史などによると、宗教や人種を超えた普遍的な道徳を見つけようと哲学者たちは苦勞していることがわかる。永遠に変らない道徳律などないらしい。そうすると法律も絶対的なものではなく、世の中の変化に応じて改定するべきものなのだろう。たとえば医学が進歩し、眠るように全く苦しまずに楽しく死ぬる薬を開発したとしても、それをだれがどう使うのか、だれが許可するかというような法律が必要になる。臓器移植なども同様で、科学の進歩は問題の解決ではなく、新たな問題の提起なのである。

物理学では、物質の世界はエントロピー増大の法則にしたがい崩壊するのが自然な現象とされている。人間社会でも、ホモやレズという性別の多様化が見られ、昔からの秩序が目の前で変化している。未来はこれらの人たちが人類の主流になるかもしれない。

将来、科学が進んで社会や文化の領域にまで及び、科学的に正しい政治というものができて政争などなくなるだろうか。将棋ではコンピューターが人より強くなったようだが、それで人間は幸せになるのだろうか。科学的に正しい音楽など聞いてみたいとも思わない。

* 6 生きる目的と死ぬ理由

生きるとは目の前にある現実に向かって進むことであろう。しかし進むといってもどちらが前かも、何が目標かもわからない。人間はその指針として神や天国という理想を作ったのだ。過去の人の理想の集積が人類の歴史であり、それに現在の自分の人生が続き、それに子孫の夢が続く。人間は日々進歩しているから過去の歴史よりも子孫はもっとよい社会を作れるだろう。我々のいる世界を経由して、未来の子孫の理想の世界へと進むのだ。我々のいる期間は短い、どんな生き方をすべきかは自分で決めなければならない。その権利と責任は現在の自分にある。

現実の世界は未完成なもので、すべての人の希望を満たしてはくれない。たとえば美も、絶対の美などというものがない。しかし、そのおかげで芸術家はいつまでも飽きることなく仕事を続けることができる。神への祈りも満たされないからこそ長続きするのだろう。登山やスポーツなどの苦しい訓練、宗教の苦行（イスラム教の断食など）も苦しいことこそが恵みで生きがいなのである。生きる苦しみと喜びを実際に体感することが、生きる意味を知ることであろう。生きる意味などは生きてみなければわからない。高齢になってはじめてわかる生きづらさもある。

人間はなぜ死ぬのか。死は永遠の眠りである。高齢者にとっては古くなった肉体の破棄と永遠の休息であり、子孫にとっては高齢者から活躍の場を譲られることである。しかし、若くして不慮の死を遂げた人はどう考えればいいのだろう。一般的に、生命体は生きていくために穀物や肉など多くの他の生命体を食料として犠牲にしているから、それらに対する感謝とお詫びが必要である。その埋め合わせとして先に述べた宝子が身代わりになってくれていると思えないだろうか。

キリスト教には「復讐するは我にあり」という言葉がある。我とは神のことで、がまんできないことがあっても自分勝手に復讐をなどせず、神にまかせなさいという意味だそうだ。そうしなければ、復讐が復讐を呼び、復讐の連鎖になるだろう。神は不運な人のことも考えてくれているのだ。

もし殺人者に襲われたら悲鳴を上げて助けを求めるのが当然であり恥ずべきことではない。しかし高齢で死を迎える人は、長く人生を楽しみ、子孫に席を譲る機会を与えられた幸運を喜ぶべきである。そして、できることなら最後の瞬間まで笑顔でいてほしい。それは自分を支えたり介護したりしてくれた人への感謝の表現でもある。支える人も支えられる人も行き着くところは同じなのである。

*7 人間の将来

我々には人間の幼児だけでなく、子犬や子猫など幼いものを可愛いと思う習性がある。西欧で発達した個人主義や、自然科学の遺伝子の考えだけでは、この“種”を超えた愛を説明できない。自然科学がどうあろうと、我々には予知能力がないかわりに言葉や文字があるから、子孫に理想という遺産を託すことができ、その代わりに我々は希望と夢をもらうのだ。自分たちにできないことでも、子孫が実現してくれるかも知れない。いやきっと実現してくれるだろう。そう考えると、膨大な借金を残すとか、放射能で地球を汚すということは子孫に対する大きな罪である。

肉体の進化は遺伝子に書かれているとされているが、それを“だれ”が書いているのかわからない。しかし今やその書き手として我々人間も参加している。たとえば、収量の多い作物や足の速い競馬馬、美しい金魚などを我々は人為的に作り出している。以前は神にお任せした領域に人間は足を踏み入れたのだ。それだけ、人間の役割と責任が大きくなったのを人間は気づいているのだろうか。

“なぜ進化論は哲学の問題になるのか”（松本俊吉編、2010年、勁草書房）という本のタイトルが、今の人間の置かれた立場をよく表している。神も人もそして猿も変化の道とともに歩いているらしい。

そして未来はまだ歩いたことのない道だから一歩先に何があるかわからないが、人間が力を合わせれば“天国”を作ることができるかもしれない。いやきっとできる。理想に少しでも近づくことができたらうれしい。力を合わせ、ともに勇気をもって歩くことが“人間として生きる”ということであろう。

以上

カケとかモリとか、おそば屋さんの話題が取りざたされていますが、なにがほんとうの問題なのか考えなおしてみる時期に来たかもしれません。

次回の神奈川銀杏会ニュース第50号は9月編集、10月1日発行の予定です。

広報幹事 生駒 純一 濃沼 健夫
